

ワークショップ3

子どもたちの「ことばの学び」を描く

—実践の言語化と共有—

子どもの日本語教育研究会事務局

齋藤ひろみ(東京学芸大学)・村澤慶昭(武蔵野大学)

1. 趣旨

子どもの日本語教育研究会では、実践と研究との相互交流を活動方針の一つとして重要視しています。子どもたちの学びの場である学校・地域等の教育現場の皆さんに、子どもの姿を語り・伝え・そして、かれらの学びの場をより一層豊かに創造して欲しいと願ってのことです。これまでの大会・研究会では、本研究会の趣旨に賛同された方に、多数の実践発表をしていただきました。大変うれしいことです。その一方で、本研究会のジャーナルへの投稿は少なく、その要因には、実践を書いて伝えることの難しさがあるのだろうと推察されます。そこで、第4回ワークショップでは、事務局企画として、「実践を記述すること」について、ワークショップ型の活動を通して、皆さんと一緒に検討することにしました。日々実践をしてはいるが、それをどう記述したらいいのか、なぜ記述するのか、そこまでして記述する意味はなにかについて、実践の読み解きと言語化の活動を通して考えてみます。なお、今回の企画では、専ら実践者自らが己の実践を記述することに関して議論します。

実践の記述で、何よりも重視されるのは「実践文脈の中の学び手の姿」です。子どもの日本語教育実践・研究の文脈では、主たる学び手は「子ども」であり、その姿としては「ことばの学び」が中心になります。「子どもたちがいかにことばを学んだか、あるいは、ことばを介して何をどのように学んでいたのか」を描くことが、実践の記述には欠かせません。子どもたちの参加の様子を捉え、言語で記述することは、実践を振り返り、その実践の意味・価値を見いだすことになります。ショーン(2001)の「行為の中の省察」です。それには、実践を対象化して、その出来事をありのままに言語化することと、子どもの教育に関わる実践主体として、間主観的に子どもたちのことばの学びを掴むこととの両方が必要となります。佐伯他(2018)は、教育・保育実践の目的が「子どもとよりよく、より深くかかわること」であることに言及し、「二人称的アプローチ」(レディ2015)を紹介し、現場の状況に身を置き、対象の情感・呼びかけ・訴えに応じながら、省察することの重要性を指摘しています。

また、日々の実践で暗黙裏に体得している実践知は、無意識の内に教育・支援に織り込まれています。子どもの姿に映し出される実践の成果に目を向けることは、暗黙知として言語化してこなかった自身の「見方・捉え方」に気づき、問い返す契機にもなるでしょう。

本研究会では、こうして実践を言語で可視化することや、それを他者と共有し対話することが実践者・研究者としての学びになると考えています。

2. 活動内容

本企画では、記述された実践の読み解きから始め、次に、実践(録画)の中の子どもの姿から、そこに生まれた「学び」を捉え、言語化することに挑戦します。この活動を通して、「子どもたちのことばの学び」を描くことによる省察の可能性を感得していただければと期待しています。

(1) 活動の流れ

- 1) 実践を読み解く1 (全体で)
- 2) ミニ講座「実践を記述するには」
- 3) 実践を読み解く2 (4人グループで)
3つの実践事例から1つを選んで、グループで話し合う(模造紙にメモ)。話し合ったことを、発表し共有する。
- 4) 授業の映像を見て、子どもの学びを言語化する。
- 5) まとめ

(2) 実践の読み解きと言語化の進め方

1) 実践を読み解くための視点

- ①子どもたちは、この活動でどのように日本語を使っていたか。
どのような力が育まれたと考えられるか。
- ②それは、実践事例のどこからわかるか。
- ③十分には描かれていないと思うことは何か(実践事例からはわからない)。
- ④この実践者は何を伝えたかったのか。

2) 子どもの学びを言語化する手続き

- ①「子どものことばの学び」をメモしながら実践の動画を見る。
- ②隣の人に①のメモをもとに「子どもがどのようにことばを学んでいたか」話す。
- ③話したことを書く(記述する)。
子どもの学習時の様子・発言の記述に加え、それを「ことばの学び」としてどう解釈したかを述べる。

3. 「実践を記述するために」

教育の分野に限らず、「記録」や「報告」は、看護、介護や保育などはもとよりビジネス等々に至るまで、さまざまなところで行われています。そこから得られている知見を踏まえながら、「子どものことばの学びを描く」ことに焦点を当てて検討します。以下、主なポイントを示します。

【記述＝言語化】

- (1) 「記録」として残すため・・・「記録」＝「情報」であることを意識する
すなわち、情報の蓄積によって、関わる人の情報共有と、経過が評価の根拠になる。
- (2) 「可視化」するため・・・行動や行為、発話などを言語化することで内容を振り返ったり他者に伝えたりすることができる。
- (3) 「専門性」を高める・・・振り返ったり共有化したりすることで、精緻化や反省、評価が生じ、次の実践の向上に結びつけることができる。

【記述の視点＝観察のポイント】

- (1) 何を見て何に気づき「言語化」するか
- (2) どのように言語化するか・・・言葉の選び方、表現の仕方
- (3) 「学び」の言語化・・・学習の効果が顕在化したと判断する根拠の表現

上記を踏まえて、学習中の子どもの姿をどのように言語化するか例示します。

①客観的記述

- a. 対象児童・生徒のその時間の様子が言語化されている。
例) △普段通り登校した
○自分から「おはようございます」と大きな声で、教室に入ってきた。
- b. こちらの発話に対して、どのように反応したかが言語化されている。
例) △漢字の復習には、あまり意欲が見られなかった
○漢字の復習をしようと言ったら「やだー」と言いつつ教材を上に出した。
- c. 自発的な発話について、前後の状況も踏まえて言語化されている。
例) △隣の子の気持ちへの配慮がない。
○隣の子が間違っただのを見て、「ばっかじゃねーの」と小さな声で言った。その声が耳に入ったのか、隣の子はノートを手で覆った。
- d. 理解しているかどうかについて言語化されている。
例) △「きつね」という単語は知っていた。
○「きつね、知っている？」と尋ねると「うん、(母語) だよね」と言う。

②主観的判断

- e. 対象児童・生徒の言動に対する評価が言語化されている
例) △国語は嫌いなようだ。
○漢字のドリル練習には取り組もうとしないが、漢字を組み合わせる熟語をつくる活動には興味を示す。活動の工夫によって意欲を喚起できそうだ。
- f. 記述が抽象的で、対象児童・生徒の様子がわからない
例) △今日も頑張っていた ○今日は時間内に課題プリントを3枚終えた

③普段と異なる状況・不測の事態の記述・・・子どもの変化／内面が表れる

- g. トラブルが生じた状況について、経過がわかるように記述されている。
例) ×AくんがBくんを殴って、Bくんが泣き出した
○Aくんが何も言わずにBくんのペンを使った。Bくんが「僕のペン、なんで勝手に使うんだよ！」と言うと、Aくんは母語で言い返し、そのままBくんにペンを投げ返した。Bくんは「Aくんが鉛筆をとりました！」と先生に訴えた。

記述が、バイアスのかかった「感想文」になってしまわないように、実際に子どもたちが発したことばや行動を記述するようにします。参加している子どもたちの言語使用の実際

を言語化して残すことにより、その場にはいない他者と共有し、検討することが可能になります。そのためには、その出来事の社会的な文脈も情報として提供することが求められます。

「子どものことばの学び」を描くことには、実践的課題の解決のための「気づき」があるはずですし、その記述が実践を巡る対話を生み出します。その対話から、よりよい学びをデザインするための豊かな手がかりが得られると思われまます。

<資料>

①全体での読み解き

後藤亜紀子先生(実践時:浜松市立中郡中学)の実践 中学生・美術

「吹き出しを利用して気持ちを表現する」

齋藤他(2015)より

②グループでの読み解き

A 桑原久子さん(実践時:浜松市立遠州浜小学校)の実践 小学3年生・国語科

「おもしろいもの見つけた」(光村図書H17-22年度)『国語三年上巻』齋藤他(2015)より

B 水島洋子さん(実践時:浜松市江南中学校)の実践 中学1年生・キャリア教育

「自分・まち・未来」齋藤他(2015)より

C 浦和かほるさん(船橋地球っ子プロジェクト)の実践

「子どものための夏休み日本語教室におけるテーマ型・活動型学習」

『言語教育実践 イマ×ココ』創刊準備号(2012) pp.20-24

<参考文献>

青柳佳子(2017)『ワークシートで練習できる観察の視点を活かした介護記録の書き方』介護労働安定センター

岸井慶子著,日本保育協会監修(2017)『育の視点がわかる!観察にもとづく記録の書き方(保育わかばBOOKS)』中央法規出版

佐伯胖・刑部育子・刈宿俊文(2018)『ビデオによるリフレクション入門』東京大学出版会
レディ,V・佐伯胖訳(2015)『驚くべき乳幼児の心の世界-「二人称アプローチ」から見えてくること』ミネルヴァ書房

齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子編著(2015)『外国人児童生徒野学びをつくる事業実践』くろしお出版